大学出版

No. 66 2005.12 秋/冬

大学と社会を結ぶ知のネットワーク

特集 「大学出版部」がめざすもの

大学出版部協会「法人化」後の可能性

「大学出版部」の将来のために
——大学出版部協会の現状と法人としての課題 ＊ 山本 俊明 ——2
協会法人化に期待する地方の眼 ＊ 小野 利家 ——7
事務局「事務所」という場から ＊ 三浦 義博 ——10
これから求めていくべき「力」を考える ＊ 黒田 拓也 ——14

● 連載
ペーパークラフトの四季——秋 ペーパークラフトと子供たち ＊ 畑野 光男 ——表2
歩く・見る・聞く 知のネットワーク 38 国宝 正福寺千体地蔵堂 ——20
大学出版部ニュース ——22
関西支部だより ——表3

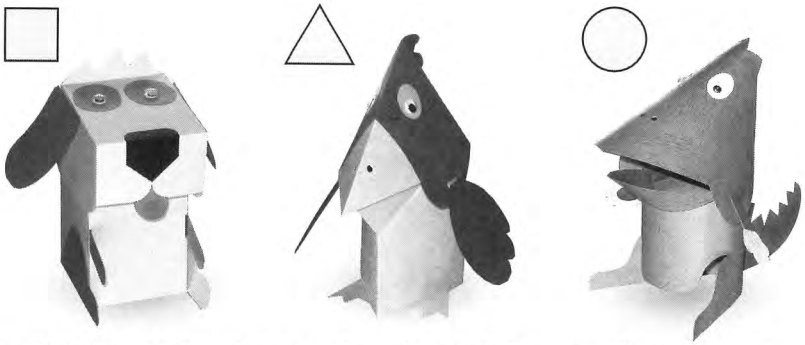
THE ASSOCIATION OF JAPANESE UNIVERSITY PRESSES
有限責任中間法人大学出版部協会

ペーパークラフトと子供たち

畑野光男
（グラフィックデザイナー）

ペーパークラフトの四季

秋



最初は、息子の通う小学校の「親子触れ合い造形教室」でペーパークラフトを頼まれたことからでした。

子供たちにモノ作りの楽しさを体験してもらうためのクラフトは、また違った難しさも有り、そういう面からも興味を持ち、引き受けることにしました。

一年生から六年生まで、約五十人の生徒さんを一度に、そして二時間以内に完成することなどの条件でクラフトを創作することになりました。

紙を丸めたり折ったり曲げたりしながらアイデアを模索して出来たのが、丸・三角・四角を基本の形状にした動物たちでした。折り数の少ない順に紙を丸めた形の「恐竜」、三角に折った「鳥」、四角の「犬」を出来るだけシンプルな造形にして、それぞれの動物に動きを与えて完成させました。

作り易くするため、色画用紙に展開図と作り方をプリントしたものを用意しました。

いよいよ当日、沢山の子供達が集まってくれました。低学年生は親と一緒に作ることとし、美術の先生と父兄の方々にお手伝いしてもらいスタートしました。制作進行は、ハサミで切り抜き、折り筋を入れ、ボンドで貼り合わせて完成させる工程です。

まず、紙の特性や取り扱い方を説明し、子供達に作りたい動物を選んでもらい、ハサミで切り抜くことから始まりました。

初めは順調に行きそうに見えましたが、時間が進むにつれて早い子と遅い子の差が大きく広がり、折り筋、組み立てが同時進行出来なくなりました。結局、一人一人に説明が必要となってしまい、先生方のサポートでも処理出来ず、時間内に終わることが出来ませんでした。作品が未完成な子供も出てしまい、あらゆる面で勉強させてもらいました。

＊＊＊＊＊

この造形教室で嬉しかったのは、子供たちがこのペーパークラフトに対して眼を輝かし夢中になって工作している姿でした。そして「別の動物たちを家で作りたい」と持ち帰ってくれたことでした。

今の時代、TVゲーム等のバーチャルな世界の中で遊んでいる子供が多いとマスコミなどで報道されていますが、そのようなことはないと私は信じています。

手を使って何かを作るということは、本来人間の持つ本能でもあり、私たち大人はこういった機会を子供たちに多く作ってあげなければいけないのです。

これをきっかけに、続けて造形教室を開かせてもらい、中学校でも美術の先生のお力添えで毎年一年生を対象に「ゆとり教育」の一環としてクラフト教室を続けています。

おかげさまで子供向けの作品も増え、民間のカルチャースクールで、小学生向けの教室を受け持たせてもらっています。

子供たちの創作力は無限大です。最初は簡単に見えるペーパークラフトかも知れませんが、楽しかった気持やモノ作りの達成感を心にとどめて、将来の大きな夢につなげてほしいと思います。

特集

「大学出版部」がめざすもの

——大学出版部協会「法人化」後の可能性

「大学出版部」の将来のために——大学出版部協会の現状と法人としての課題

山本　俊明（大学出版部協会副理事長・聖学院大学出版会）

大学出版部協会（以下、協会）は、現在二八の会員で有限責任中間法人を組織している。一九六三年の協会創立時に比べ、加盟出版部は三倍に増えた。協会加盟の大学出版部（以下、出版部）が発行する新刊点数は、データのある一九八〇年から二〇〇四年までで、一・七倍になった（表1）。これは加盟出版部数が増加したことにもよるが、他方で表2にあるように、三〇点以上刊行している出版部が増えたことによる。

三〇という点数は、G・R・ホウズが『大学出版部』（東京大学出版会）の中でアメリカの大学出版部が「創設期」を経て、在庫売上で新刊書の原価をカバーできるようになる「建設期」の指標としてあげた数字である。アメリカと日本の出版界の規模の違いを考慮し、日本の一般出版社の新刊点数と比較すれば、年間二〇点で十分に「建設期」にあるとする判断も成り立つかもしれない。協会に加盟する半数の出版部が年間二〇点以上を刊行しているのである。

協会加盟出版部の新刊刊行点数は、出版界全体の一％であるが、書籍の部門別点数割合（二〇〇〇年）では、出版部は人文科学二一％（出版界全体一二％）、社会科学三八％（同二四％）、自然科学一四％（同八％）の発行点数の割合が多く出版部の出版物の傾向を表している。しかも日本の出版文化賞、学会賞だけでなく、海外の学会賞を受賞するような優良な学術書を数多く刊行している。その受賞書籍数は三五〇点を超えている。

大学出版部は、出版不況といわれる中でも活発な出版活動を続けていて、いまや日本の大学、学術世界、出版界において、ひとつの勢力になったといえるであろう。

しかし、これからも大学出版部は発展し続けることができるのだろうか。十八歳人口の増大とともに拡大してきた大学と出版部は、これから縮小期に入るのではないだろうか。あるいは大学は自然淘汰の時代に入ったのであり、むしろ法人として大学出版部が今後生き残るためにどのよう

な方策があるかを考える必要もあるのではないか。

日本の大学出版部の拡大を齎した経営方針の三つの特徴とそれがこれからも有効であるかを検討し、大学出版部の将来のために法人として取り組むべきことを提案したい。

表1

	大学数	教員数	院学生数	学部学生数	出版部設立数と新刊点数		新刊点数
1950年/a	201	11,534		223,535	9	50年まで	
1955年	228	38,010	a/ 10,174	513,181	1		
1960年	245	44,434	15,734	601,464	0		a 11,173
1965年	317	57,445	28,454	895,465	2		14,728
1970年	382	76,275	40,957	1,344,358	2	＊2004年	19,226
1975年	420	89,648	48,464	1,652,003	3		22,435
1980年	446	102,989	53,992	1,741,504	3	a 478	27,709
1985年	460	112,249	69,688	1,734,392	2	554	35,920
1990年	507	123,838	90,238	1,988,572	2	581	38,680
1995年	565	137,464	153,423	2,330,831	4	771	61,302
2000年	649	137,568	205,311	2,471,755	0	794	67,522
2005年/b	726	161,713	b/254,483	2,508,091	1	b ＊830	b 74,587
b/a	3.6	14	25	11.1	29	1.7	6.6

日本の大学出版部の経営方針の特徴

日本の大学出版部は学術出版社として五十年の歴史を持つが、その経過の中でいくつかの経営方針の特徴を作り出している。第一は、母体大学との関係の中で独立採算制を目指してきたことであり、第二に、独立採算を成り立たせるために、教科書などの出版で経済的基盤を築こうとしたことであり、第三に、大学出版部として採算の取り難い学術書出版を活動の中心においたことである。

協会はひとつの法人となったが、二八の出版部の組織は、それぞれ、学校法人（一一）、財団法人（四）、株式会社（二八）、任意団体（五）、有限責任中間法人（二）と多様である。各出版部の歴史の中で、母体大学との関係により組織のあり方が決定されているが、共通するのは、独立採算制を目指していることである。学校法人でも寄付行為に「収益事業」と位置づけられている出版部は、収支バランスを保つか、収益を上げることが求められる。事業部に位置づけられた出版部も他の事業による収益で、収支バランスを取ることが求められる。財団法人においても「経済的には独立採算制をとること、即ち大学の補助を受けることなく事業に要する一切の経費を自己の財政で賄うこと」（東京大学出版会、一九六六年）、「組織的・経営的に独立している」（法政大学出版局）ことが確認されている。

独立採算であることは当然のことと思われるかもしれないが、アメリカの大学出版部が大学の一部局に位置づけられ、大学からの継続的な補助金によって非営利法人として経営され、モノグラフに特化した出版活動をしているのとは大きな違いがある。

日本の大学出版部は「独立採算制を目指すこと」に最大限の努力を傾け、収支バランスを図りながら刊行点数を増加させてきた。しかし、大学と出版部の関係に微妙な距離を作り出した。出版部の必要性、可能性、出版を担う専門職員の配置などについて、大学と出版部の間で繰り返し確

認する重要な契機が見失われたのである。

第二の特徴は独立採算制を成り立たせるために企画方針が、「教材関係図書および講座・体系といった継続刊行物を持って経済的基盤とする」（東京大学一九五九年度以降の企画方針）とされたことである。出版部が教科書出版に取り組むという方針は出版部が創設された時期と関わる。

表1にあるように、一九五〇年までに、九の大学出版部が設立されていた。その後、二〇〇二年の聖徳大学出版会の設立までの期間は、大学が「爆発的に拡大した」時期である。大学数において、三・六倍、教員数で十四倍、学生数で十一倍である。「新制大学の発足から三年を数えた教養課程ではテキストの必要性に関心が高まった」（東京大学出版会、一九五二年）ことを受け、「教科書委員会が発足」（東海大学出版会、一九六四年）し教科書出版が進められた。「大学の量的拡大」に応じて大学出版部は設立され、確実に販売の見込みのたつ教科書出版を軸に経営的基盤を確立しようとしたのである。

同じように大学の量的拡大期に大学出版部を発展させたアメリカの大学出版部が「知の爆発」を契機に、「その社会的機能をモノグラフ出版者と規定し、新しい知的発見の伝達に自己を限定している」のと比較すると、日本の大学出版部とその出版物の性格は、「大変無限定である」（箕輪和男）という批評もある。しかし独立採算が求められた日本の大学出版部では、教科書などの安定的な収入で原価回収の困難な学術専門書を発行するという経営方針を選択せざるをえなかった側面もある。

第三の経営方針の特徴は、日本の大学出版部は「採算を取ることが困難な学術書」の出版をその活動の中心に置いていることである。ほとんどすべての出版部が、設立目的に、「学術書・教科書・教養書（啓蒙書）の出版」を掲げている。さらにそのいくつかは「民間出版社が採算上刊行を引き受けないような優良学術図書の刊行」（九州大学、同様の表現は北海道大学、東京大学、聖学院大学、大阪経済法科大学、関西大学などの出版会の設立の主旨に見られる）を目的としている。この点ではアメリカの大学出版部

表2　新刊点数

	1980年	1985年	1990年	1995年	2000年	2004年
刊行点数合計	478	554	581	771	794	830
加盟出版部数	14	16	19	22	26	29
年間新刊点数						
0－9点	4	4	6	7	11	9
10－19点	3	3	2	2	1	6
20－29点	2	3	4	4	3	5
30－49点	0	4	4	4	7	5
50－99点	4	1	2	4	3	3
100点以上	1	1	1	1	1	1

表3　職員数

	1983年	1988年	1993年	1998年	2003年
加盟出版部数	14	16	20	24	27
職員数計	175	184	215	279	251
1－9人	6	7	10	16	19
10－19人	4	4	4	5	5
20－29人	1	1	2	1	0
30人以上	1	1	1	2	2
無回答	2	2	3	0	1

に倣って、学問の発展のためにあえて採算の取り難い学術書出版に取り組むという方針をとった。協会全体のデータはないが、おそらく学術書六〇%、教科書二〇%、教養書その他二〇%という比率になるのではないか。この点、同じ東アジアにある韓国の大学出版部がそれぞれ三〇%、四五%、二五%、また中国の大学出版部が二〇%、六〇%、二〇%と言われるのと比較すると日本の出版部の特徴がわかる。

大学出版部が学術書の刊行点数を増加させてきた背景には、研究者数の量的増加があることは言うまでもないが、それだけではなく、大学改革の中で、自己点検評価が進められ、すぐれた研究業績を出さなければならないという「圧力」も存在していることがある。一九九二年にカーネギー教育財団がアメリカ、イギリス、日本、韓国など世界の一四カ国で実施した『大学教授職の国際比較』（玉川大学出版部）の調査があるが、その中の「学術書を三年間に何冊出版したか」という項目によれば、日本は、人文科学系〇・六七冊（八位）、社会科学系一・一四冊（一位）、自然科学系〇・八四冊（一位）、工学系〇・七五冊（二位）、保健医療系二・六六冊（一位）、芸術系〇・三五冊（六位）となっている。これらの学術書のすべてが大学出版部から刊行されたとは考えられないが、研究者が研究成果を公開する活発な活動に呼応するように、各出版部は刊行点数を増加させてきた。一九九〇年代から、研究者が主導して新しい出版部が設立されてきた背景にもこうした大学改革の動向がある。

日本の大学出版部は、その経営方針として学術書の出版を中心に置き、出版コストの削減や公的な出版助成を獲得するなどの最大限の努力をしながら、教科書などの収入の見込みの立てやすい出版物の発行により、経済的基盤を築こうとしきた。しかも母体大学からの補助を期待しない独立採算で経営しようとしてきた。大学の拡大期にそれは有効であったかもしれない。事実、安定した経営ではなかったと思われるが、大学の拡大期には出版部の数も刊行点数も増加してきたのである。しかし大学の縮小期と変革期にその経営方針はいつまで継続することができるか。それは「不可能の可能性」を追求するような困難な課題ではないか。

法人として取り組むべきことの提案

大学出版部は将来にわたって存在し続けることができるだろうか。出版部が大学の機能を担い続けるために、法人として取り組むべきことを提案したい。

第一に提案したいことは、大学が大学出版部にどのような役割を果たすことを期待しているか調査することである。

繰り返すが、大学は競争と淘汰の時代に入った。また大学は改革の只中にある。それに伴い出版部も変化することを余儀なくされた。特に一九九一年の「大学設置基準の大綱化」で一般教育と専門教育の区分が廃止されたことにより、これまで出版部で出版していた「一般教育科目」の教科

書の性格が大きく変わった。またセメスター制の導入で、通年で採用される教科書が減ったのである。教科書により経営の基盤を築いてきた出版部には大きな危機である。

また、研究者が研究業績を発表したいという動向だけでなく、大学院の拡充政策により、博士論文が大量に産出され、しかも学術書として出版したいという圧力が強まっていることもある。出版部は対応に苦慮する状況が生まれている。出版活動を通して、大学の教育機能と研究機能に参加してきた大学出版部は、どのような役割が期待されるのか、問われなければならない。

電子メディアの登場への対応の課題もある。ダニエル・コイト・ギルマンは、大学の教育と研究がその「壁」によって制限されていることに対して、印刷メディアによって大学の外にまでその教育と研究を広げることを構想し、近代の「大学出版部」を設立した。いまやインターネットがその「壁」を乗り越え、印刷メディアに代わって、学術情報流通と教育の新しいメディアになりつつある。Eラーニングが導入され、学術情報が電子化されている大学においては図書館や情報センターが新しいメディアの担い手として登場している。その中で、大学出版部は大学の教育と研究にどのように参加できるか、問われなければならない。

これらの問いに対する大学の回答を集積して、大学と大学出版部の関係を捉えなおし、協会として「大学出版部の意義」について、提言をだすことである。

第二の提案は、日本の大学出版部の会計システムを構築することである。出版部といっても組織形態が異なり、会計基準も異なる。しかし、出版部の設立目的を実現しようとするときに財政的困難に直面するという共通の課題を持つ。各出版部の知恵と経験を集積し、困難をどのように解決していくかの標準化された基準が必要である。

アメリカの大学出版部協会は、各出版部の経理担当者や会計士が研究して、採算の取りにくい学術書出版の会計システムを作成した。協会も日本独自のシステムを作成する必要がある。

協会の二八の会員の三分の一は、設立十年以内か、また年間刊行点数が十点以内である。表3にあるように職員数も少ない。標準化された会計システムがあればこれらの出版部がこの会計システムを参考にして、より効率のよい継続的な活動の進め方を見出すことができる。すべての出版部が同じ規模になる必要はないと思うが、小規模出版部は小規模でも個性的な出版活動を継続できる経営のあり方があるはずである。規模の異なる出版部がそれぞれ個性的な出版活動を継続することより協会全体の拡充につながるであろう。

以上の提案は実現困難なものかもしれない。しかし有限責任中間法人大学出版部協会の定款に各出版部の代表者の実印が二十八押されたのは、協会が一体となって大学出版部の将来を切り開くことを確認するためでもあったと思う。

協会法人化に期待する地方の眼

小野　利家（大学出版部協会副理事長・関西支部長／京都大学学術出版会）

昨年二〇〇五年七月、大学出版部協会が長年の夢であった法人化を有限責任中間法人といういささか長ったらしく、かついかめしい名称の下、めでたく実現させた。何ごとも手弁当方式の協会傘下の二八大学出版部が、長年の宿願を、約半年間でそそくさと仕上げきったのは、一当事者としても喜びに堪えない。とりわけ、定款認証を得るにあたって、設立時の社員となった二八大学出版部代表の印鑑を捺印してもらう全国リレーが一〇日間かかって無事終了したことを知ったときは、やはり感無量であった。

いうまでもなく、協会というからには業界団体にすぎない。しかし、大学出版部協会の場合は、数の少なさということもあろうが、横の連携は異常といってよいほどつよい。大学を母体とするという基盤の共通性と成果物が似通っているということが、その要因ではあろう。つまり、「業種」としての学術図書出版業という側面より、「業態」としての大学出版部という共通基盤に依拠して結束しているといえようか。その大学出版部の全国団体が法人化によって、より全国性を高めたという視点、つまりは首都圏一極集中だけではすまないよという視点から、この大学出版部という「業態」の今後の発展の方向を考えてみたい。それが小稿の意図するところである。

大学法人化後の大学出版部

周知のように、一昨年（二〇〇四年）四月、八九の国立大学法人が誕生した。公立大学も同様に法人化の方向である。あまつさえ、株式会社立の大学も生まれる。日本の大学は、すべてが法人化され、大学の運営はそれぞれが自律的になされることとなった。国立大学法人には、巨額の運営交付金が継続的に国庫から拠出される代わりに、年間一%ずつの経費縮減が課された。運営の効率化である。一方で、自己収入をあげるため、さまざまに自主的な試みも始められている。

そうしたなかで、大学出版部の新設の動きもおきてきた。直接的に大学内の一機構として設置する場合と、独立法人にする場合とで、その形態は異なる。これらの最近の大学出版部新設は、数年前とは違って地方にシフトし、わけても国立大学が目立つ。じっさい、国立大学法人法でも、国立大学の業務のひとつとして「当該国立大学の研究の成果を普及し、及びその活用を促進する」（第二二条）と研究の成果公開を義務づけていること、とりわけ大学の存立にかかわりかねない「第三者評価」が格段と強化・確立されたことなどが、こうした気運を促進しているのであろう。大学出版部をそのツールにしようというわけである。

もちろん、今回の国立大学法人の誕生以前から、大学出版部をつくろうという運動はさまざまになされてきた。ただ、共通していえることは、大学が全入時代に突入する厳しい環境のなかで、いかにして自己のアイデンティティを確立すべきか、それを社会に発信する基地として出版部が構想されたということであろう。また、地方から、ということについては、おそらく多くの場合、そうした大学に所属する研究者にとって身近に成果公開ができる場がなかったということも創設を促した要因であろう。

いずれにしても、地方の国立大学を中心に、今後とも大学出版部づくりは推進されるはずである。これに対して、新生大学出版部協会はいかに対応すべきか。

新しい大学出版部、新しい大学出版部協会

新しくできた、またはできようとしている大学出版部は、当然ながらしばらくは揺籃期を経験せざるをえない。しかし、いうまでもなく大学出版部と名乗るからには事業体であり、社会に開かれたものである。同じ成果公開でも、大学の予算で発表される紀要や研究年報のようなものとは訳が違う。否応なく、市場原理の支配する世界に投げ出される。私の勝手な予測では、そうした厳しい環境を予測しつつも、年間数点規模の新刊刊行しか計画しえない大学出版部が二桁台は誕生、もしくは活動している状況がやってくる。こうした事態をどう考えるか。協会傘下の二八大学出版部に限っても、トップの年商二〇億円から一〇〇〇万円以下というピラミッド型の経営規模を、なおかつ大学出版部という「業態」の同一性でくくりうるのだろうか。

現実には、困難がつきまとうのは明らかだろう。たとえば、取次店の対応を予測すれば、ひたすら規模の経済の論理のみが貫徹され、個別に分断されて、われわれはたんなる弱小出版社として遇されるだけだろう。しかし、少なくとも大学出版部は、研究者の最新成果を誰よりも身近に知り、それを研究者やその予備軍に一番早く手渡せるという他にない利点をもっている。「出発点」と「終着点」が原則的には同じなのである。その中間に、いわゆる流通機構が介在しているにすぎない。この業態の同一性を改めて起爆剤とするようなことが、まさにいま構想されなければな

らないと考える。

理由は二つある。ひとつは、すでに述べたように、これからできる大学出版部の多くが個別に流通の荒波にもまれることが予測される以上、そうした大学出版部を束ねてなんらかの「圧力」を持ちうる状況をつくらなければならないということである。もうひとつは、いわゆる流通の複合化という事態の到来である。学術図書が伝統的な店頭販売から徐々に排除され始めるとともに、ネット販売やルートセールス、直販など多チャンネル販売時代に対応しなければならなくなった。これは、新設大学出版部だけの問題ではない。学術図書を扱う出版社、とりわけ大学出版部にとってますます深刻さを増す課題である。

ここまで回りくどく論じてきたが、じつはすでに大学出版部協会の理事長・山口雅己氏が明快な答え（見通し）を出している。『出版ニュース』（二〇〇五年九月中旬号）に「活発化する大学出版部」と題する論文を寄稿し、「将来の協同販売に備えたい」としたうえで次のように述べている。

「大学出版部設立の気運がますます高まっているなかで（中略）いまだ充分な力をもてない出版部を束ね、出版物の全国展開を担保する機構があれば、新設出版部にとって心強い味方になり得るし、協会加入の促進要因ともなるだろう」――私の結論が、ここに先取りされたかたちで表明されている。

ただ、私がこれにあえて付け加えるとすれば、こうした当初は小規模で出発せざるをえない新しい大学出版部の創設自体を、協会が出版部未設大学に働きかけて促進し、ピラミッドの底辺を拡大したうえで「束ねる」ことにより力を集結すること、それを意図的に仕掛けることはどうだろうか、ということである。物事には「機」がある。協会が法人化してさまざまな事業プランが考えられているなかで、改めて検討されてしかるべきプランだと思うのだが。

新しい友に

現在、大学出版部を構想されようとしている大学に。

ただひとつ、どういう大学出版部をつくろうとなされるか最初に徹底的に議論していただきたいということである。そのうえで、もし若手研究者に成果発表のチャンスを提供したいということであれば、相応の出版助成制度をぜひつくっていただきたい。そして、とりあえずつくるのではなく、少なくとも一〇年計画を最初に検討すべきだろう。

そのさい重要なことは、初期資金と態勢をどう構えるかであろう。

徐々に足し算をしながら、と誰しもが思う。しかし、「束ねる」や初期資金づくりなどの掛け算が、「機」に合わせて不可欠であることも確かである。

事務局「事務所」という場から

三浦　義博（大学出版部協会事務局長・東海大学出版会）

大学出版部協会事務局「事務所」

ＪＲ御茶ノ水駅改札を出て聖橋を渡る。湯島聖堂を右手に見ながら、湯島天満宮への道を真っ直ぐに歩いてゆく。清水坂下交差点から坂道を少し登ると、左手に明石書店の真紅の看板が見える。その明石書店一階に、大学出版部協会事務局は開設した。

普段はあまり人通りが多いとはいえない参道のようなこの道は、正月三箇日や梅の季節になると、湯島天満宮詣での人で溢れるそうである。宣伝効果抜群の場所であるらしい。元旦には二八大学の「大学案内」を参拝者に配布する、等という話まで出ている。冗談かと思って聞いていると、ホントだったりするから恐ろしい。

事務所は道路沿いの二方向がガラス貼りで開放的である。惣塚事務局員は早速二八大学出版部の図書目録をガラス窓に沿って展示し、道行く人たちの目をひいている。

昨年四月八日の幹事会終了後に、事務局事務所候補のこの場所を訪れた時は、単なる十五坪の空間に過ぎなかったが、事務機器が徐々に揃い、いかにも事務所らしくなってきた。しかし購入した物は一つもない。全て頂き物である。わが事務局員によると唯一不足しているのは「ビールを沢山収納できる冷蔵庫」だけだそうである。

七月一日の法人登記を経て、僅か一ヶ月で事務局のインフラが整い、機能し始めたことに小さな感動さえ覚える。多分にそれは、定款認証作業の緊張感に起因するものであろう。

定款認証顛末記

二〇〇五年七月一日が「有限責任中間法人大学出版部協会」の登記日であることは、既定の方針であった。そのためには、六月二十三日に公証人役場で定款認証を得なければならない。全国二八大学出版部を定款巡回させて、代表者の契印・捺印・捨印を揃えなければならない。どうした

ものか、時間がない！ カレンダーを睨みながら頭を痛める。どう計算しても一日不足だ。

六月八日であったと思うが、山口理事長に「関東十八大学の定款巡回をどうするのか」と問われた時は「山口さん、間に合いません。登記日が遅れると思います」という回答が喉元に詰まって、返答に窮した。

定款の巡回をどこから始めるか。三浦総務担当幹事が九州から始めることを即断する。巡回経路の第一段階は、九州大学出版会→北海道大学図書刊行会→東北大学出版会→関西地区と決まる。関西地区では京都大学学術出版会の小野関西支部長が持ち回り（走り回り）、予定の日数を一日短縮して巡回経路第二段階の中部地区に送る。名古屋大学出版会の伊藤さんは三重大学へバイク便を飛ばし、三重大学はその日のうちに関東地区に送ると言う。これで間に合う可能性が出てきた。

関東地区十八校の巡回計画を各出版部に連絡する。すべてOKという返事。間に合うようだ。

六月二十日の玉川大学出版部を皮切りに、三浦（義）、三浦（邦）、惣塚の事務局三名が日々定款をバトンタッチしながら持ち回り、二十三日正午に東京大学出版会に到着。二八番目に東京大学出版会の代表者捺印を頂いて完了。三浦総務担当幹事と二人で司法書士事務所へ赴く。定款、印鑑証明、現在事項全部証明書を確認の上、神田公証人役場に持ち込み、定款認証を得ることができた。公証人の先生が、専修大学法科大学院の教授も勤める学究肌の人であったことも幸いしたかもしれない。「労作ですね。いいでしょう。定款認証いたしましょう」と言っていただいたときは、緊張感が解けてなんとも言えずホッとした。初期の予定通り「有限責任中間法人大学出版部協会」の発足である。

土日を除き、全国二八大学出版部を十一日間で巡回したことになる。

定款を持ちまわりながら、汗を拭き拭き思った。凄い結束力だ、と。この結束力を法人化以降の事業展開にどのように結びつけるか。「有限責任中間法人大学出版部協会」には可能性がある、と。

有限責任中間法人大学出版部協会の事業

「近未来の実現可能な構想」（渡邊勲『大学出版』64号）に大学出版部協会が法人へ移行することの必然性、意味合いなど「法人化の原点」が描かれている。併せて「活発化する大学出版部」（山口雅己『出版ニュース』9月中旬号）を読んでいただくと、有限責任中間法人大学出版部協会の今後の道筋が理解できるのではないだろうか。

大学出版部協会が法人化した今、協会にとって必要なことは目的に向かって行動を開始することである。その「目的」と「何をするか」は、定款第3条に記載されている。

定款第3条には「当法人は、日本における大学出版部の健全な発展をはかり、もって学術文化の向上と、社会の発

展に寄与することを目的とし、その目的に資するために、次の事業を行う」として十項目の事業を掲げている。

（一）機関誌の編集及び発行　（二）書籍の発行及び販売　（三）各種書籍刊行助成に関する業務　（四）著作権に関する業務　（五）出版に関する研修会、講演会の開催　（六）出版文化の普及、啓発、調査及び研究　（七）国内の出版に関係する諸団体との連絡・調整・交流　（八）外国の大学出版部、その連合組織及び学術諸団体との連絡・調整・交流　（九）社員相互の連絡と親睦　（十）前各号に掲げる事業に附帯又は関連する事業

上記十の事業の殆どは、大学出版部協会四十二年の歴史において、先輩達が積み重ね、現四部会が実行しているものが殆どである。法人として実行すべき新たな事業も付加されてはいるが、大学出版部協会にとっては、等身大の事業項目である。大きな違いは一つ、法人格を獲得したことにより「事業化という新たな色彩を帯びた」ということである。

大学出版部協会の事業展開は、従来もそうであったように四部会による基本計画が中心となるべきである。協会活動の核である四部会による事業計画の立案と実行こそが、協会活動を永続的に支えるのである。事業計画には収益事業の他に大学出版部協会として相応しい文化事業も含まれる。そして四部会の活動枠に入らない事業計画は常任理事会と事務局、さらには社員から提案されるであろう。

社員それぞれの位置

だが現状はそれほど単純ではない。社員二八大学出版部はそれぞれの顔を持っている。大学出版という共通項を共有しつつも決して一様ではない。経験と実績においても組織運営上の問題においても個々に違いを持っている。大学出版部協会社員出版部の二〇〇四年の新刊総刊行点数は七三〇点であり、業界全体の新刊刊行点数の一％程度であろうか、出版業界の中では大きな勢力とは言えない。

日本の出版界では今「複写権」が大きな課題として浮上しているが、「出著協ニュースNo.16」の「出版物委託状況一覧」によると、八大学出版部一三八九点が見えるだけであり、その内一一九二点が東大、東京電機大、東海大の委託出版物である。委託出版物のラインアップも決して充分とは言えない。「複写権」問題の前提条件である「出版契約」がどの程度締結されているのか、という問題もありそうだ。権利主張をするにしては、大学出版部協会は弱体である。

社員二八大学出版部の規模が小さいことは決して問題ではないだろう。「大学出版という共通項を一様に持つ強み」を発揮し、日本の出版業界に独自の地歩を築くことは可能である。しかし「社会的に弱体である」ことは致命的である。規模は小さくとも、法人としての大学出版部協会がその使命と役割を果たすためには、業としての出版を成立さ

せる法的インフラ整備は欠かせない。

今まで以上に衆知を集め、二八大学出版部の「決して一様ではない個別事情」を呑みこみながら、どのような形で有形・無形の利益還元を社員に対してできるのか、大学出版部協会がどのような方法によって社会的自己表現ができるのか、常任理事会と事務局そして四部会には、将来を見据えた議論と展望が求められている。そして法人化とはそれを可能にするシステムでなければならない。

「キーワードは連携・協働の強化である」(「活発化する大学出版部」)、あるいは「法人化を実現出来たとしても、その活動の実際は法人化前と代わり映えのしない水準にとどまる事は許されない」(「近未来の実現可能な構想」)とはそのような意味合いにおいて理解されるべきであろう。

事務局の機能について

さて「事務局事務所」であるが、「協会の「自立」を促進し法人化後の協会運動を実質的に支えることになるのは、事務局である。事務局に姿かたちを与えるのは事務所と事務局員である。事務局は仕組みであり、事務所は具体的な「場」であり、事務局員は場に依拠しながら運動の一翼を担う人間である」(「近未来の実現可能な構想」)、という一文が全てを言いつくしている。

「有限責任中間法人大学出版部協会」の目的実現のためには「仕組みとしての事務局」と「具体的な場としての事務所」が如何に有機的に機能するか否かにかかっているようだ。

そのためには、事務所が「人の集う場」「議論の場」「情報の集約・発信の場」として機能することが求められる。

ちと大雑把な三浦事務局長と、少しばかり小うるさい惣塚事務局員が陣取る事務所では、既に国際部会や営業部会が開催され、「大学出版部連絡会」や「関西共同販売機構」の会議が開かれるなど、訪れる人も少しずつ増えている。書類の整備や資料の収集が徐々に始まり、新刊の展示なども実験的に始めている。

大学出版部協会創設以来、事務局機能は実質的に東京大学出版会が担ってきた。協会の自立と運動の場として新たに開設された事務局事務所を「協会運動の夢を語る」「場」として、協会運動の活動拠点として、更には遠隔地出版部の東京分室として、多くの協会員に利用してほしいものである。

これから求めていくべき「力」を考える

黒田　拓也（東京大学出版会編集部）

昨年八月二十五日〜二十七日の日程で、恒例の大学出版部協会夏季研修会が福岡で開催されました。毎年一回開かれるこの研修会は、二十八大学出版部のメンバーの多くが参加し、全体会ではケーススタディが行われ、さらに各部会（編集・営業・電子・国際）に分かれて活発な議論が展開されます。

昨年は、そこに新たな試みが加わりました。編集・営業両部会共同で「拡大編集企画ケーススタディ」が企画され、そこに書店および販売会社の方々を招待し、これまで編集部会内で行われていた「編集企画ケーススタディ」を公開したのです。

あえて外部の方々にこの「ケーススタディ」を公開したのは、「書店激戦区」である福岡で、書籍販売に関わる多様な方々に、われわれが携わっている「学術出版」のあり方をご理解いただき、今後の新たな出版の方向を共に議論していくベースをつくりたいと考えたからでした。

名古屋大学出版会で数々の定評ある書物の刊行を手がけてきた橋宗吾氏によるケーススタディは、書籍編集に関わる者にとってはひとつの重要モデルとして、それ以外の方々にとっては、書物が構想されてから企画化まで、そして企画化から刊行までの長期にわたる苦闘が、さまざまな場面が眼前に浮かび上がるようなかたちで提示されました。

この試みを通して、書店・販売会社の方々には書籍の編集に対し強い印象を持っていただけたようで、われわれにとって非常に喜ばしくかつ力強い援軍を得たような思いでした。

以上に紹介させていただいた試みは今回の夏季研修会のひとつのクライマックスでしたが、その試みにも触発され、ここではもうひとつ、われわれが研修会および編集部会で重ねた議論の一部を紹介し、そこから私なりの私見を披露してみたいと思います。なお、以下で展開される議論は、筆者の個人的なものであり、東京大学出版会および大学出

版部協会の意見を代表するものではないことをあらかじめお断りしておきます。

われわれの夏季研修会は、「ケーススタディ」をひとつの核にして開催されます。これは毎年ひとつの大学出版部に報告が要請されるものです。昨年は京都大学学術出版会から、「京都大学学術出版会の現状と課題：主に企画・編集の側面から」と題された報告がありました。報告を担当された鈴木哲也氏の詳細なレジュメをここで紹介できないのは残念ですが、私なりにその報告を整理すると、以下に挙げる七つの、非常に興味深い論点を提示できます。

①コスト・利益構造、②博士論文等をベースにした書物の企画・編集のあり方、③叢書・シリーズ、④教養書・教科書、⑤刊行物の分野別・領域別の構成、⑥販売のあり方、⑦助成金（出版補助金）

右に挙げた各論点は、大学出版部だけではなく、広く専門書版元と呼ばれる出版社すべてが日ごろ問題意識をもって取り組んでいるものかと思います。しかしながら、それらの多くをバランスさせながら活動していくことにはさまざまな困難が伴います。これからの議論は「大学出版部」を念頭においていますが、「大学出版部」のなかでもその規模、組織形態等必ずしも一様ではないので一般化しづらいのが現実です。しかし、これまで私が参加してきた「編集部会」における議論の積み重ねから感じることは、けっしてそのような差異は大きな問題ではなく、その場その場で「いかに明確な問題意識を持つか」ということが重要で、「出版」という活動に携わる以上、置かれている立場の相異こそあれ出発点は一緒であることを前提にしたいと思います。

七つの点のすべてに詳しく言及するのは筆者の能力に余るところですので、ここでは順不動ですが、先に挙げた論点を強弱をつけながら考えてみたいと思います。

順序が逆になりますが、まず⑥の点から。

出版業界全体の不況が久しく叫ばれるなか、専門書の出版を中心におく大学出版部にとって、このテーマほど、「なんとかしたい！」ものはないように思います。出版部数は限られた範囲で価格も高価。自ずと書店で読者の方々の目に触れる機会はどうしても少なくなります。そこに内容も難しい、となったら手枷・足枷をはめられているような気さえします。でもここでくじけては、われわれ大学出版部の「ミッション」である、出版という行為を通じての「学問の普及、発展への貢献」は実現できません。ではどうしたらよいのか。現時点で、残念ながら明確な答えはないのですが、夏季研修会およびその後のフォローアップの議論のなかでひとつ私なりに重要なイメージがつくられてきました。それは、編集者によるさらなる販売への関与、加えて営業・販売部門における編集的機能の強化、ということです。両者は当然、重なる領域をもっています。ベン

図のイメージです。

ある書物についての情報を一番もっているのが著者であり担当編集者です。その情報はどのように生かされているのか。私は現在編集部に身をおいていますが、過去の経験をふりかえって、書物をとりまく情報の生かし方について満足のいくものであったかどうか、仮にうまくいっていたとしてその経験をみえるかたちで蓄積し他者と共有できるような状態にできていたかどうか、確固たる自信はありません。販売担当者との打ち合わせやいくつかの場面において情報をやりとりする機会はありますが、それが生きた情報になっているのかいつも不安です。

一方、販売担当者のほうは、その書物に関する情報に対してどのような姿勢で臨んでいるのでしょうか。生きた情報を引き出す構えになっているでしょうか。自らが活用できる情報を得るには、当事者間の意見交換だけではなく、最終的に読者に販売していただく書店の状況のより精確な認識、編集者とは違った観点からの読者層の把握等といった受身ではないアプローチがより求められているように思います。そのためには販売担当者も売るべき書物に対し明確な問題意識をもってその都度接していかなくてはならないと思います。

おそらく、専門書の出版において編集者と販売担当者との間のコミュニケーションの問題はもっと真剣に詰めるべき課題でしょう。編集者があらゆる手段を使って販売の実践に取り組み、販売サイドでは書物に関する情報だけでなく、その著者やとりまく学問的状況等について積極的にアプローチしていく、といった能力を高めることが必要です。双方向から迫る努力なくして良質なコミュニケーションは成立しません。

編集部会では、編集者が販売に取り組む方法のひとつとして、さまざまなメーリングリストを活用した販売促進の方法など具体的な議論も重ねられていますが、今後、大学出版部協会全体でもその手段の多様性をもっと追求していくべきでしょう。

販売担当者の編集的機能の強化については地道な努力を続けるしかありませんが、先の「公開ケーススタディ」に参加していただいた書店・販売会社の方々のご意見を拝聴していると、その能力はいま切実に求められていて、いかに質の高い情報を提供できるかが最大の課題であり、その先に現状と比べてどのような変化が生じるのか、間断なく見極めていく必要があるように思います。

最近、個性的で魅力的な書物を刊行している、一人もしくはごく少人数で営まれている出版社がありますが、その成功しているところでは、日常の活動でこれまでに私が感じたことが自ずと実践できていると思われ、その活動からは大いに学ぶべき点があるように感じています。

上記に関連して①について。この点は、とくに各大学出

版部の個性が出るところです。本号の山本氏の論文でも触れられていますが、現在二八ある大学出版部のそれぞれの形態は実にバラエティに富んでいます。株式会社もあれば有限責任中間法人、財団法人の形式をとっているところ、大学の一部局として成り立っているところ、そして規模の違いもさまざまです。したがって自ずとそれぞれ基準とする経営指標も違いますし、出版事業における収益構造も多彩です。しかしながら先の⑥について述べたことの努力を前提に、いかに効率の良い経営体質をつくりしっかりとした書物を刊行し続けられるか、という課題は共有できることです。ここでは①と⑥の相互関係、さらには企画全般に関する課題との関わりをみていく必要があるでしょう。

経営体質をどのようにバランスさせていくかは、売上げがあがる、つまり先の⑥の課題の克服が大きな要素であるわけですが、それを支えるのが③④⑤のあり方です。教養書は定義が難しいのですが、この分野は多くの出版社がしのぎを削っているところでもあり、また近年は「新書ブーム」といわれるように多様な新書が登場し、価格面でも安価なわけですから規模の小さな出版社にとってはなかなか競争力の発揮しづらいところです。

そうなりますと「大学の中」に身をおくわれわれとしては、とくに良質な教科書の継続的な開発・刊行に力を注ぐことが、やはり必要不可欠なものになってくるでしょう。手前味噌ですが、東京大学出版会においては法律学の分野で高い評価を得ている教科書が複数存在し、売上げ全体に占める割合は非常に大きなものです。また東大教養学部の蓄積を背景にしたさまざまな教科書群も重要な位置を占めています。ただそのような教科書の開発は時間もかかりますし、著者がかけるエネルギーも莫大です。

しかしながら、あくまで私見ですが、良質の教科書というのは、単に安定的な販売が見込めるというだけではなく、真に学問の最先端への扉を開いてくれるものだと思っています。著者の深い知見と行き届いた配慮がちりばめられた教科書には、学問の先端へと導くいくつものヒントが隠されています。だとするならば、そのような教科書の開発・刊行は、大学出版部に課せられた「ミッション」をまさに体現するものであるように思います。

教科書から一歩踏み出して、専門性と体系性を併せ持ったものとして叢書・シリーズ（講座も含む）は位置づけられますが、この形態の難しさは今日増すばかりです。まず「全〇巻」という数冊まとまったものは、ある一定期間をすぎるとなかなか書店に置き続けてもらえないという現実があります。日々多くの書物が刊行されるなかで限られた書店の棚スペースを考えるとそうした苦しい現状も致し方ないとも感じてしまいますが、ではこれまでにその時代時代の重要な学問的成果を叢書・シリーズ（講座）という形で世に問うてきたものに変わるオルタナティブをどのよう

につくりあげていけばよいのでしょうか。もはやそのようなものは必要ない、無理だという意見もあると思いますが、日々研究の現場に接しているとなにかのかたちで全体像を伝えたい、とやはり強く思います。どういった分野のものが求められているのか、どのような領域をカバーしていったらよいのか、そしてそれをどのような「器」で読者に提供したらよいのか、ここでも格好よくいえば、現場と市場とのコミュニケーションのあり方が問われているのだと思います。

最後に②と⑦について。大学院の重点化以降、ある意味制度的に博士論文が数多く生産されるようになりました。深く考察された多様な研究成果が多く生み出され、それが出版を通じて学問のさらなる発展に寄与していくならばとても素晴しいことではありますが、事はそう単純には運びません。大学出版部はもちろん、さまざまな出版社に博士論文をベースにした出版の打診の数は増え続けていると思います。それらを出版してある一定以上の読者を獲得できればよいのですが、なかなかそうはならないのが現実です。それを乗り越えるには、その博士論文がどこまで当該領域の枠を越えていけるのか、京都大学学術出版会の鈴木氏の言葉を借りれば、「「二周り外」の領域へのインパクト」をどこまで持ちうるのかが出版への大きな鍵となります。ここに編集者や出版に携わる者が関与する余地があります。

しかしその関与のあり方は簡単ではありませんし、マニュアルもありません。そこにあるのは難しい判断のオンパレードです。その論文の個性をいかにピックアップし、「「二周り外」の領域へのインパクト」をどう見出すのか、それは本当に求められているものなのか、この書物が先頭になって新たな分野を切り開いてくれるのか、書物の経済性をどのように担保するのか（ここでの出版助成金の役割は大きく、現実問題として多様な助成の制度をしっかりと認識しておく必要があります）等々、悩みはつきません。ただそれを乗り越えたものは、派手さはありませんがしっかりとした売行きを示し、結果として出版社にとって大きな貢献をしてくれます。

言うは易し、行なうは難し。その実践の難しさは、これまでに挙げた七つの論点の大部分が、「編集」と言い換えてもよい連続した作業のなかにすべて埋め込まれているからなのではないかと思っています。したがって「編集者」も「販売担当者」も同様の「力」が高いレベルで求められているのです。七つの論点のそれぞれのなかで議論されるさまざまな課題がバランスされ、あるひとつの明確な像としてむすばれるとき、成功の道筋が見え、出版のダイナミズムを感得できる瞬間が訪れるのかもしれません。

二〇〇五年七月一日に大学出版部協会はこれまでの任意団体から「有限責任中間法人」へと「法人化」されました。

これまで以上に個性ある事業を行える可能性が高まりました。どのような事業を行うにせよ、質の高い書物を刊行し、学問世界の面白さ、楽しさ、厳しさを広く世に伝えていくことが最大の課題であることに変わりはありません。ここでは私個人の私見として、個人的にさらには大学出版部に身をおく仲間の皆様との議論を通じて、その唯一とも言っていい目標に近づくために、どのようなことを考え実践していくか、そのひとつの方向性を述べてみました。今後の議論のたたき台になればと思います。

国宝　正福寺千体地蔵堂

正福寺地蔵堂（国宝指定・昭和27年３月）
［写真・東村山ふるさと歴史館］

明星大学（日野校）、明星大学出版部は、東京西郊多摩丘陵に位置する。かつて都区内の大学が郊外へ移転し始めたが、その走りの時期の創設である。多摩都市モノレールを立川・高幡不動方面から多摩センターへ向かい、「多摩動物公園」を過ぎて唯一のトンネル「多摩丘陵トンネル」を抜ければ、最寄り駅「中央大学・明星大学」となる。軌道を挟んで直ぐの向こうが中央大学、少し望めば帝京大学、小高い丘の向こう側には東京薬科大学がある。

さて本題の、「歩く・見る・聞く」――、大学近隣の高幡不動（真言宗智山派別格本山高幡不動尊金剛寺）や動物公園の案内か、明星大学の稀覯書コレクションの紹介か、そんなことを巡らしながら、高幡不動の仁王門や不動堂が重要文化財であることから連想が飛躍して、「ならばいっそ」と都内唯一の国宝建造物金剛山正福寺千体地蔵堂まで「歩いて、見る」ことにした次第である。所在は上記。多摩北西部にあり、北は埼玉県所沢市と境を接する。

ＮＨＫライブラリー『国宝全ガイド』（一九九九年三月）から概要を借用する。

【建】正福寺地蔵堂　一棟　　室町

附　棟札　一枚

方五間、一重裳階付、入母屋造、柿葺、裳階銅板葺

正福寺は北条時宗を開基、無象静照を開山とする臨済宗の寺で、弘安元年（一二七八）の創立と伝える。地蔵堂は応永十四年（一四〇七）の建立。鎌倉の円覚寺舎利殿（国宝）とほぼ同大の、構造様式もよく似た仏殿で、禅宗様建築の典型である。

八月初めに訪ねてみると、鞘堂のようなテントで覆われ、工事のただ中であった。「三十年に一度実施される」「屋根の葺き替え工事が、四月中旬～九月末（予定）まで行われ」ると掲示がある。例年、八月八日が施餓鬼会、九月二四日はお地蔵供養で、ともに法要行事として扉が開かれ、お堂の内部も公開される。「江

所在地　〒189-0022　東京都東村山市野口町4-6-1
交通手段　西武新宿線もしくは西武国分寺線、東村山駅から徒歩10分ほど
参　観　境内自由
地蔵堂の内部観覧は8月8日・9月24日・11月3日

東村山ふるさと歴史館（東村山市教育委員会）
電　話　042-396-3800
ＵＲＬ　http://www.city.higashimurayama.tokyo.jp/ から

工事中の風景。正面右斜めから。

戸時代の地蔵信仰が盛んなとき、多くの小さな地蔵尊の木造が奉納され、堂内の天井に近い長押に置かれ、千体地蔵堂の名もここに由来し」、「祈願する人は、小地蔵尊像を一体借りて、家に持ち帰り、願いが成就すれば別に一体添えて奉納する」（案内板の説明）。四囲の壁面に小さな仏の描かれる中国敦煌の千仏洞、京都三十三間堂の千手観音千体仏などをふと思い浮かべる。千体仏は元々インドに由来するというが、遙か時代を下った、その伝播の現れと考えてよいのだろうか。

今回の葺き替えでは、柿材には椹（さわら）が使われ、その薄い板（幅18㎝、長さ30㎝、厚さ2・4㎝程度）を少しずつずらしながら重ねて並べ、竹釘で止める［東村山ふるさと歴史館のＨＰ］。全体、何枚掛かるものだろう。修復前の全景と、併せて偶々の工事風景をお目に掛ける。

十一月三日は地域挙げての「地蔵まつり」が催される。竣工成れば、文字通り「柿落とし」のお堂が拝観に供され、奉納地蔵の開眼供養や雅楽の舞が行われる。縁日も門前に立つ由。この時期、東京は都文化財ウィークの期間である。

境内の一画に（隣り合って）、八坂神社の、これも唐様造の小さな祠が立ち、その横に置かれる倉の中には神輿が蔵される。神仏習合、神仏一体の趣もある。

インターネットで検索すれば、予期せぬ向きの知見が得られる。なまじなことを書いたところで、慧眼の力作群に遼か及ばず。世に好事家多し。この国宝にかんしても、数多の写真、お人によっては動画を付けて、幾らも風流人士のレポートがある。どうぞ、ネットでご参照を。

蛇足ながら。下関長府にもほとんど写しの、これも国宝、功山寺仏殿が遺される。先の『ガイド』には、時代は鎌倉、「方三間、一重裳階付、入母屋造、檜皮葺」と記される。円覚寺舎利殿（室町・南北朝期）も方三間であるから規模としては正福寺のお堂の方が大きい。「禅味」という言葉がある。それぞれがまことに異数の禅宗建築で、独特の格が漂う。

（明星大学出版部　湯川振一郎）

大学出版部ニュース

新設大学出版部の動向

二〇〇五年七月、大学出版部協会が「有限責任中間法人」として発足し、事務局を文京区湯島の一角に開設してほぼ九ヶ月が経過した。

今回お届けする「大学出版」の特集は『「大学出版部」がめざすもの－大学出版部協会「法人化」後の可能性』』であり、法人化に特化した特集である。執筆段階では「理想論」であり「願望」に過ぎなかった「法人化の可能性」の幾つかは、本誌の刊行が遅れている間に現実のものとなり、協会運動の大きな柱となりつつある。

その中でも最も顕著な動きを示しているのが、大学出版部新設の全国的な動向である。多くの大学はまだ設立検討の段階であるが、国・公立大学七校、私立大学四校の全国十一の大学から大学出版部設立の可能性・方法論に関する問い合わせが寄せられている。

その中でも状況が先行しているのは、武蔵野大学と富山大学の二校である。学校法人武蔵野女子学院が母体となり、二〇〇五年四月に株式会社として武蔵野大学出版会は設立され、二〇〇六年五月には大学出版部協会の新規加盟申請手続きを進めている。また二〇〇六年一月には富山大学出版会が有限責任中間法人として発足し、二〇〇七年度の協会加盟を目指している。

大学出版部連絡会

大学出版部協会と交流を持ちながらも協会未加盟校である弘前大学出版会、東京学芸大学出版会、埼玉大学出版会の三大学出版会が、「大学出版部連絡会」を立ち上げた。協会からは顧問の渡邊勲、事務局長三浦義博の両名が、大学出版部連絡会顧問として参加している。二〇〇六年三月二十四日には「第一回大学出版部連絡会」の会合が、大学出版部連絡会の三大学に上記一一大学の中から四大学が参加して湯島の協会事務局で開催される。

大学出版部連絡会においては会則や会費などの「しばり」を設けず、誰でも参加できる緩やかな連合体として位置付け、相互の情報・意見交換、個々の疑問や課題などを持ち寄りながら、年に二、三回の会合を開催して「大学出版部設立のための準備」を行うことを目的としている。

大学出版部協会の求心力

二〇〇四年度の国立大学の法人化を契機として、国・公立大学の出版部設立の動向が活発化することは予測されていたが、「有限責任中間法人大学出版部協会」の設立が、大学出版部連絡会や新設の大学出版部にとって大きな求心力となっているのであろう。

二年～三年後には、大学出版部協会の加盟校は三五を越えることが予想される。

大学出版という魅力に満ちた世界の扉を開けようとしている多くの大学に対して、「有限責任中間法人大学出版部協会」はどこまで責任ある対応ができるか、法人化したわれわれの課題は大きい。

三浦義博（東海大学出版会）

北海道大学出版会

▼櫻井義秀著『**東北タイの開発と文化再編**』（A5判・5775円）急速な経済の発展や変動にさらされる東北タイ農村社会での一〇年以上にわたる現地調査を踏まえて、農民、労働者、NGO活動家の生活構造と意識の変化を描き出す労作。▼増田隆一・阿部永編著『**動物地理の自然史**』（A5判・3150円）日本列島と東アジアに生息する哺乳類や両生・爬虫類を対象に、第一線で活躍する15人が魅力あふれる研究の最前線を紹介する。▼杉山滋郎著『**北の科学者群像―「理学モノグラフ」1947―1950**』（四六判・1890円）戦後復興期、札幌から全国に発信された、一般市民と科学者を繋ぐ「科学コミュニケーション」の先駆〈理学モノグラフ〉シリーズ。温故知新、そこに執筆した科学者たちの生き生きとした人間像を通して、現代の科学者の役割を問いかける。▼中尾佐助著『**中尾佐助著作集Ⅳ 景観と花文化**』（A5判・12600円）中尾は日本の庭造りとヨーロッパのガーデニングに彼我の植物文化の違いを鋭く見抜いた。「花の美学」にかかわる著作を「中尾園芸文化論」として集成。

東北大学出版会

▼山下文男著『**津波の恐怖―三陸津波伝承録―**』（四六判、二四九頁、二一〇〇円（税込））三陸津波の歴史の特徴は、猛烈なパワーによる大量死の恐怖と、多くの遺体の藻くず化、加えて体験の風化による悲劇の繰り返しであった。その津波海岸に生まれて長い間津波防災に取り組んできた著者が、津波の危険が予告されている列島動乱の時代を迎えて世に送る、津波から我が身と地域を守るための心得と提言がここに集大成！

▼渋谷努著『**国境を越えた名誉と家族―フランス在住モロッコ移民をめぐる「多現場」民族誌―**』（A五判、一九六頁、三三六〇円（税込））著者は、モロッコからフランスに移民した人たちを調査するために、移住先のフランス都市部と出身地のモロッコ農村、都市部に赴いた。本書は、この現地調査に基づき、彼らの生活と移動の実態を記述し、さらに、グローバル化する現代世界の中の移民はどのようなものか、移民によって文化はどのように変わるかを考察したものである。フランスに住むイスラム教徒の生活実践も興味深く紹介されている。

流通経済大学出版会

▼角本良平著『**三つの民営化―道路公団改革、郵政改革とJR**』A5判・二六〇頁・三一五〇円

「小泉首相の民営化は、誰のための、又何のための民営化なんだろう？手段が目的になっていないか？」国民の多くがそう思っているのではないだろうか。

この十月には道路関係四公団に代わる高速道路株式会社六社が、いよいよ発足する。高速道路の管理会社と資産保有会社の分離という複雑な上下分離体制で、果たして①運営に赤字を生じないこと②投資により新規の赤字を招かないこと、という当初の目的を達成できるのだろうか。郵政の民営化については、今（平成十七年七月十九日現在）参議院での審議が行われているが、いまだに国民には民営化後の全体像がはっきりしないままである。「政府の保護と関与」の継続や金融を含めたグループ経営の維持が予測される。ここでも何ための、何を目的とした民営かなのか、という疑問が解けない。

しかし、これらの民営化は二十一世紀の日本を方向づける大改革である。本書は、改革成功のための手掛りを提供する。

聖学院大学出版会

▼チャールズ・E・メリアム著（和田宗春訳）**『シカゴ――大都市政治の臨床的観察』**（定価未定、近刊）

本書は、『政治権力』などの著作で知られ、アメリカ「現代政治学の父」といわれるチャールズ・E・メリアムの都市行政論の古典の翻訳である。急激に膨張する大都市シカゴの成長過程にどのような政治機構、政治活動、人間組織が現れてくるのか、政治権力がどのようにして誕生してくるのか、市議会はどのように機能するのか、を詳細に描く。本書は、メリアムが一九〇九年にシカゴ市議会議員に選ばれ、六年の議員経験を含む二十八年のシカゴ在住の経験をもとに執筆したもので、メリアム政治学の原型とみなされている。

かつて同じ訳者により翻訳出版されていたが、今回、翻訳を改訂し、詳細な訳注を加え、また人名・事項索引を付すことによって、本書は、シカゴはもちろんのこと、この時期に大きな転機を迎えていたアメリカの政治行政の全体像が理解できるものとなっている。

聖徳大学出版会

「心と身体の癒しシリーズ」の第三巻は「こころとスポーツ」とタイトルも確定し、現在執筆進行中です。先に報告しましたとおり、本学の花沢成一教授（臨床心理学）と永島正紀教授（精神医学）が著者となります。（近刊）

本書の構成は、第一章心身の健康と、スポーツ、第二章発育期のこころと、スポーツ活動、第三章スポーツ活動と、こころのひずみ第四章精神保健活動と、スポーツの有用性、第五章スポーツカウンセリング・メンタルトレーニングとなっています。

著者は、それぞれ、オリンピック選手の心理面のアドバイザーでもあり、本書の特色は、具体例を取り上げながら、こころとスポーツ活動の関連を、科学的に解明している点にあります。スポーツに関連するこころと身体の関係を実践的に把握し応用できる内容となっています。

尚、当シリーズの後は、「聖徳保育選書」の刊行を企画し、現在、企画準備委員会にて出版計画の立案中です。

本学出版会の柱の一つとなる企画となります。

麗澤大学出版会

▼サイモン・メイ著／中村保男訳**『日本退屈日記――日本の凋落と再生』**（四六判・三〇四頁・一九九五円）東大哲学科客員教授にして実業家、異色の著者がユーモアたっぷりのエッセイで綴る、不思議の国・ニッポン。バブル崩壊以降の日本社会・風俗に分け入って、日本のアイデンティティを問い、再生を予言する。

▼我妻和男編著**『光の国・インド再発見』**（A5判・二四六頁・二一〇〇円）IT産業を中心に経済力の伸長著しいインドは、その多様性ゆえに全体像は捉えがたい。言語・文化・宗教・歴史・経済等の様々な視点からインドの実相を明らかにする。

▼中道嘉彦・犬飼孝夫・田中俊弘・梅田徹編著**『これで読める・聴ける時事英単語集』**（四六判・三四四頁・二三一〇円）

『日本退屈日記』
定価1995円

慶應義塾大学出版会

▼久米邦武編著、水澤周訳注、米欧亜回覧の会企画『**現代語訳　特命全権大使 米欧回覧実記**』**全5巻**（二六二五〇円）漢文訓読体の原文が持つ力強い美しさを生かした流麗な現代語と、最新の研究成果にもとづく八〇〇に及ぶ詳細な注により、明治初期における西洋文明見聞録の一級資料が、解りやすく読みやすい形で甦る。

▼唐成著『**中国の貯蓄と金融―家計・企業・政府の実証分析**』（三五七〇円）中国の経済発展の原動力を、家計行動に焦点を当てた実証分析により明らかにする、気鋭の中国人経済学者による初の研究書。

▼権丈善一著『**再分配政策の政治経済学Ⅰ日本の社会保障と医療（第二版）**』（三五七〇円）学界や実務家に注目されつつある著者が、民主主義社会における権力の作用や価値判断の問題を扱って社会保障の経済研究に新たな視点で切り込む。

▼トマス・アクィナス著、柴田平三郎訳『**君主の統治について―謹んでキプロス王に捧げる**』（二六二五円）トマスのほぼ唯一の政治思想論文。最も著名な「帝王学」の一つで、トマス思想全般の理解にも不可欠。訳者による注と解説も充実。

産業能率大学出版部

▼波頭亮著『**思考・論理・分析**』―「**正しく考え、正しく分かること**」**の理論と実践**―（二三一〇円）

「思考」とは何か。言い換えるなら「ものを考える」という頭脳作業は何をしていることなのか。論理的であるとはどういうことなのか。何を行えば最も効率的に正しい答えを得られるかという「合理的分析プロセス」の具体的作業と有用なテクニックについて解説した。

▼『OPEN INNOVATION』―今求められるオープン・イノベーション型社会構造―（二三一〇円）

本書は、ハーバード・ビジネス・スクールで研究されている最新のイノベーション理論をベースに、従来型のクローズド・イノベーション手法の限界を知り、新たなオープン・イノベーションの道案内となるべく執筆した。

著者の人的ネットワークを駆使した調査にもとづく内容があますところなく紹介されている点は類書を圧倒しており、ビジネス専攻の学部学生やMBA志望者はもとより、ビジネスマン必携の書。

専修大学出版局

▼麻島昭一著『**戦前期中小信託会社の実証的研究――大阪所在の虎屋信託会社の事例**』（七九八〇円）

日本資本主義の発展過程で、資金源泉や資金運用はどう行なわれたか。大正・昭和初期に発展した虎屋信託の創業家に残存した株主総会資料、重役会議事録、業務報告書、大蔵検査資料などは、日本信託業史研究において画期的な一次資料であった。著者はこの実証的研究に加えて、関係者からのヒアリングも行い、当時の信託業経営、受託状況、資金運用、損益構造、大蔵当局の監督指導などを詳細に調査・分析している。

▼大石和男著『**タイプAの行動とスピリチュアリティ**』（二五二〇円）

競争心が強く負けず嫌いで、常にじっとしていられないタイプA(Aggressive)者がかかえる問題点とその修正への試みを、文献研究と調査データに基づき論じている。またタイプAが実存的空虚（生きがいの喪失）と関連あるとの仮説の下に、そういう行動が心の隙間を埋めているのではないかとも考え、現代のスピリチュアリティ喪失にも論及している。

大正大学出版会

▼廣澤隆之著『**『唯識三十頌』を読む**』（TU選書3　一九九五円）唯識思想が大乗仏教教理学の基礎学問であることの重要さは今日でも変わることはない。『唯識三十頌』はその理論体系の最も洗練された簡潔な綱要書である。それゆえこの短い詩頌の中には、仏教思想をつらぬく根本問題がいかんなく説かれている。確かに唯識思想は魅力的である。（中略）フロイトやユングが深層心理と向かい合うよりも千年以上も前に、阿頼耶識、末那識という概念で人間の心の奥底を見つめようとする唯識思想が、仏教における重要な思想として登場していたことは、驚きであるとともに、インド仏教の奥深さを痛感せざるをえない。（中略）また現代の病理の根源に唯識思想ははたして解答を提示できる思想であるのかを問いつつ、唯識思想を学ぶことが私にとっての課題となった。」（本書「『唯識三十頌』を読んで」より）

巻末に、サンスクリット・チッベト・漢訳及び和訳を対照したテキスト及び参考文献を付す。

玉川大学出版部

二〇〇五年秋　全巻完結

▼『**金田一春彦著作集**』（各八九二五円）

「**第五巻　国語学編五**」

真言宗に伝わる声明『四座講式』から鎌倉時代の日本語アクセントを再現した画期的労作。著者の博士号取得論文であり、アクセントの史的研究の第一作である。

▼「**第八巻　国語学編八**」

著者四十年の方言研究の成果を収めた『日本語方言の研究』と、「音韻・アクセントによる日本語の方言区画」「アクセントの分布と変遷」など六論文を収録。

▼『**ホーリズムと進化**』（スマッツ／石川光男・片岡洋二・高橋史朗訳）ホリスティック教育、ホリスティック医学の原典。宇宙の物質と生命の進化を司る力であるホーリズムが、高度な全体の誕生とホリスティックな社会への前進を保証しているという壮大な思想を唱える。

『ホーリズムと進化』
定価5985円

中央大学出版部

▼川原彰著『**現代比較政治論――民主化研究から民主主義理論へ――**』（二九四〇円）世界秩序の大転換をもたらしたグローバルな民主化の動向を、比較政治学の視点から総合的に分析。

▼宮守正雄著『**昭和激動期の出版編集者――それぞれの航跡を見つめて――**』（二二〇五円）元圖書新聞記者で二十余年の中大マスコミ講座講師が激動期の出版編集者の志と活動の姿を活写する。

▼岡本正明著『**小説より面白いアメリカ史**』（二三一〇円）アメリカ史の「こぼれ話」をふんだんにもりこんだ、物語風の随筆集。最新にして最良の入門書。

▼池田正孝・中川洋一郎編著『**環境激変に立ち向かう日本自動車産業――グローバリゼーションさなかのカスタマー・サプライヤー関係――**』（三三六〇円）日本自動車産業の強さの秘密を自動車メーカー・部品メーカーの協働関係の中に探る。

▼佐藤清編著『**フランス――経済・社会・文化の位相**』（三六七五円）現代フランスを経済・社会・文化面から解明。自動車産業の軌跡からパックス法やパリテ法の成立までを視野に入れた現代フランス論。

東京大学出版会

▼シリーズ「融ける境　超える法」発刊

高度産業・情報化社会は、換言すれば「高度〝法〟化社会」。増加する法的紛争に対処するため、法律家、法的思考力を備えた人材が求められている。

この法化社会のニーズに応えるシリーズ「融ける境　超える法」は、最先端の法律問題を分析、領域毎に全5巻に編成し、東大法学部を中心とした気鋭の執筆陣が新しい法システムを大胆に提示する。

九月発売の第1巻**『個を支えるもの』**は、人権や社会保障など、個人とその生活を支える法システムの変貌を明らかにする。同じく九月刊の第2巻**『安全保障と国際犯罪』**では、「人間の安全保障」が叫ばれる最近の情勢を踏まえ、安全保障と刑事法の交錯局面を抉り出す。

以降毎月一冊、巻数順に刊行。定価五〇四〇円～五二五〇円。全5巻は以下のとおり。

1　岩村／大村編**『個を支えるもの』**
2　山口／中谷編**『安全保障と国際犯罪』**
3　江頭／増井編**『市場と組織』**
4　フット／長谷部編**『メディアと制度』**
5　城山／山本編**『環境と生命』**

東京電機大学出版局

▼『指紋認証技術―バイオメトリクス・セキュリティ』（画像電子学会編／星野幸夫監修／二八三五円）

指紋認証は、古来より単純な個人識別や契約の管理用途に使われてきた。やがて近代的犯罪捜査の切札となるが、現在では最も実用的な生体認証（バイオメトリクス）としての応用が注目されている。

本書前半では指紋認証の基本的な考え方と、情報処理としての技術が確立するまでの過程を解説する。また後半では各要素技術と、掌紋識別も含めたシステム展開、さらにそれらの保証となる認証精度について専門的観点から解説する。

生体認証の背景をなすのは、主に自分の指紋を積極的に認識・一致させなければ恩恵の得られないシステム（FPID）である。しかし、例えば犯罪捜査のように被験者ができるだけ一致させまいとするシステム（AFIS）とも表裏一体の関係にある。その両者に共通する情報処理技術や、精度確保の技術が丁寧に解説される。単に新しいセキュリティ・システムを紹介するだけでなく、技術的にも一歩踏み込んだ解説書である。

東京農業大学出版会

▼『オホーツクの本――その自然と産業――』美土路知之責任編集

生物産業学部は、豊かな自然と全国でも有数の農林漁業・加工業を要したオホーツク地域の特性を生かした教育・研究を展開している。その中でも、フィールドワークにおいては、地域社会との連携も数多く生まれ、新たな研究の方向性も定まりつつある。オホーツクの自然と産業の密接な関係を、一つの大きなテーマとして、一つ一つの発見を深く掘り下げ、オホーツクの自然と産業を分かりやすく解説したものが本書である。

平成一七年三月／四六版
一二八頁／税込価格一六八〇円

▼『コメ経済と国際環境』清水昂一、小林弘明、金田憲和編著

カロリーベースで四〇％の自給率、七％弱の専業農業者と多数の兼業農家等、問題が顕在化し、食料の供給は？計量経済の専門家による問題解決接近への理論と分析

平成一七年一月／A五判
二六三頁／税込価格三五七〇円

法政大学出版局

▼田辺竹治翁聞書『四万十川Ⅰ――山行き』（永澤正好著・三三六〇円）最後の清流四万十川流域は、山と川と海を生活の糧とする人々の営みの場であった。今年九七歳になる田辺翁は、前世紀までの流域の暮らしを知る数少ない証人として、獣や魚や鳥たちと共に生きた日々の記憶を語る。二〇余年に渡る聞書の集大成。〈以下続刊〉Ⅱ：川行き――四万十川の魚の生態と川魚漁の体験を語る／Ⅲ：村は万華鏡――百姓仕事や若衆宿など、流域の村の生活と人間模様を語る。全3巻。

▼『石原莞爾』上・下（阿部博行著・上＝四二〇〇円／下＝三三六〇円）石原莞爾の思想と行動を、厖大な書簡・日記等の資料を駆使して丹念に追跡し、その知られざる実像に迫る。満州国建国をめぐる軍首脳部内の葛藤や二・二六事件における反乱軍の断固たる鎮圧など、昭和史のカギを握るかずかずの事件の渦中で描かれた壮大な夢と、戦争へとひた走る現実の行方をたどる。石原をめぐる未発表の書簡等新資料と多数の写真を加え、下巻には詳細な年譜・参考文献・人名索引を付す。

武蔵野美術大学出版局

▼MAUライブラリー③『現代芸術の彼岸』（藤枝晃雄著・三三六〇円・四六判・二八四頁）錯綜し混迷を深める現代美術に、今まさに読まれるべき待望の書、ついに刊行。抽象表現主義の思想を根底に、著者がここ数年にわたって著してきた批評・論文の集大成。現代芸術界に対する著者の透徹した審美眼と鋭い批評精神は一読の価値あり。

【その他のMAUライブラリー】

▼MAUライブラリー①『ネパール周遊紀行』（田村善次郎著・一九九五・三四八頁）ネパール高地の集落の生活や習俗、儀礼を多数写真と共に紹介。

▼MAUライブラリー②『塾の水脈』（小久保明浩著・一八九〇円・二二八頁）江戸時代～現代までの「塾」の変遷から学校制度だけではない教育のあり方に迫る。

明星大学出版部

▼津久井喜子著『破壊からの誕生―原爆文学の語るもの』A5判　一五〇頁　二六二五円

原爆をテーマとする作品を生み出したものは、比類なき被爆体験を世に残し伝えたい、核戦争を繰り返してはならないという悲願と、全人類存続への切実な希望を込めた作家の意思、使命感であった。ホロコースト文学との共通性を見据えて、証言としての歴史的価値、言語芸術としての文学の価値、人類に対する警告としての価値を確認し、その意義、役割を論ずる。

【目次】○日本の原爆文学の価値と意義［現代世界における日本の原爆文学の意義・四人の女性被爆作家の視点］○代表的作家と作品―その1［大田洋子・正田篠枝・峠三吉・栗原貞子・原民喜・林京子］○代表的作家と作品―その2［井伏鱒二と『黒い雨』・堀田善衛と『審判』］○原爆文学とホロコースト文学

▼井出洋一郎著『新版・美術館学入門』四六判　本文三五〇・カラー図版二〇頁　三六七五円

早稲田大学出版部

▼『家族のメタファー――ジェンダー・少子化・社会』（丸山茂、四五一五円）「家族の世紀」の終りが頻繁に語られている。最新データをもとに家族と社会の関係を模索する新しい家族論。

▼『ブランドと広告ビジネス――ブランディングを基軸とした広告会社の評価システム』（東英弥、五二五〇円）企業が求めるブランド広告はどう創ればよいか。クライアントの要求に応えるための広告会社のビジネス・モデルを提案する。

▼『報道が社会を変える――石橋湛山記念早稲田ジャーナリズム大賞記念講座講義録』（原剛［コーディネーター］、一八九〇円）阪神・淡路大震災の継続取材、旧石器発掘ねつ造のスクープ、産廃の島香川県豊島の惨状告発など、報道現場の鮮烈な視点を紹介し、内橋克人・佐野眞一のジャーナリズムも収録する。

装幀／菊地信義

東海大学出版会

▼吉田武著『私の速水御舟―中学生からの日本画鑑賞法』（A5判、二六〇頁、二五二〇円）

速水御舟は大正期から昭和初期にかけて活躍した日本画家であり、重要文化財指定の「炎舞」「名樹散椿」をはじめ、「洛北修学院村」、「京の舞妓」など、有名な作品を多数残している。

本書は、前半で速水御舟の作品の鑑賞と業績の紹介をしながら、著者がそこから受けた印象・感想を通して、御舟の創作活動の発意の根源に迫り、後半では「日本画」の絶対的な定義を試みるものである。

言葉の表面だけを捉えれば、「日本画」とは近代になって我が国に数多紹介された「西洋絵画」に対するものであるが、画材や対象、技法の違いをもって「日本画」を定義しようというものでは、もちろんない。永い年月をかけて醸成された文化的特性や精神性に焦点を当てているのである。そして著者は、この精神性こそが日本独自の「美」を生み出したと説き、「日本画」の絶対的定義を展開している。

名古屋大学出版会

▼長谷川博隆訳『モムゼン ローマの歴史』Ⅰ：ローマの成立、Ⅱ：地中海世界の覇者へ（各六三〇〇円）ローマ史の最高傑作。人間の営みの「全体」を描く。

▼伊藤之雄著『昭和天皇と立憲君主制の崩壊―睦仁・嘉仁から裕仁へ―』（九九七五円）近代日本の立憲君主制はなぜ挫折したのか。渾身の力作。

▼川島正樹編『アメリカニズムと「人種」』（三六七五円）歴史と現在を、グローバル化の中で問い直す。

▼佐藤彰一／池上俊一／高山博編『西洋中世史研究入門』［増補改訂版］（三七八〇円）好評の研究案内、待望の最新版。

▼大橋良介著『聞くこととしての歴史―歴史の感性とその構造―』（四七二五円）共通感覚の深層で他者の声を聞く。

▼島本佳寿広編『基礎からの臨床医学―放射線診療に携わる人のために―』（三九九〇円）臨床現場で必要な事項を、CT、MRIなど最新の画像で平易に解説。

▼後藤節子／森田せつ子他編『新版テキスト母性看護』Ⅰ・Ⅱ（Ⅰ：三八八五円、Ⅱ：四五一五円）Ⅰでは概論と保健を、Ⅱでは周産期の正常・異常経過を解説。

三重大学出版会

■井谷泰彦著『**沖縄の方言札―さまよえる沖縄の言葉**』A5版一七五頁（本体一八〇〇円＋税）

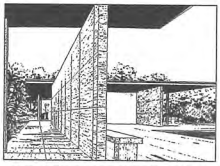
1章「方言札」の原型
2章「方言札」とエスニシティ／「方言札」ができる時／「方言札」誕生の理由
3章言語教育と「方言札」／村内法と四訓札／普通語時代の「方言札」／標準語励行期の「方言札」
4章「方言札」の消滅／戦後教育と「方言札」／「方言札」の思想／沖縄語の未来

■神松一三著『**日本テレビ放送網構想と正力松太郎**』四六版一八〇頁（本体一八〇〇円＋税）戦後もっとも成功した「呼び屋」

前置き／1章日本テレビ放送網のプロトタイプ／2章GHQの基本方針／3章メガ論争の帰結／4章正力松太郎の追放解除／5章正力発言・柴田発言の検証／6章日本テレビ放送網構想の挫折／後書き

京都大学学術出版会

▼『Design Essence from Sketchbook ―**建築設計のための教科書**』高松伸著（一九〇頁・三七八〇円）創造とはつまるところ模倣でもある、とは言い過ぎだろうか。ともあれ、過去の作家とその作品を意識しない建築家は、誰一人としていない。近代建築の期を画した数十人の建築家・建築運動の最も重要な作品を、高松伸自身がスケッチし図面化したノートを通して、近代建築の原理から空間構成の実際までを学ぶ。建築設計の用語集としても優れた構成で、これ一冊をドラフターに置けば建物が建つ、ことを目指した画期的スタイルノート。京大工学部の建築設計論の教材として学生に評判の高い教材を、お洒落なスケッチブック風の書籍にアレンジ。学生から若手建築家まで、必携のテキスト／参考書。



バルセロナ・パヴィリオン：距離感（第1章「建築の原理」より）

姿はまるでスケッチブック

大阪経済法科大学出版部

▼白榮勛著『**東アジアの政治・外交研究―「間島協約」と裁判管轄権―**』（四四一〇円）間島での在留朝鮮人問題は中日の対間島政策の重心である。本書は「間島協約」の締結から「満州事変」にいたるまでの、間島在留朝鮮人の「裁判管轄権」をめぐる中日両国の政策推移の歴史的経緯を体系的に整理、分析し、中日両国に所蔵する一次史料を実証的に分析しているところに特徴がある。近代間島における中国、韓国（朝鮮）、日本という国家間、ひいては民族間の政治外交および歴史的関係を「裁判管轄権」という視角から解明しようとした新しい試みである。

▼アナトリー・コーシキン著／佐藤利郎訳『**大国の攻防―世界大戦における日ソ戦―**』（三五〇頁・四八三〇円）本書は太平洋戦争において、ソ連とその同盟国たる米英両国がどのような対応をとったか、またソ連が第二次世界大戦中に対日政策および軍事戦略をどのように展開していったかを詳細に分析しつつ、まだ十分解明されていない問題についても独自の見解を述べている。

大阪大学出版会

▼芝哲夫著『**適塾の謎**』四六判・上製・一六〇頁　定価一五七五円　緒方洪庵の人間像と蘭学塾をめぐる隠れた事実を史料から読みとる。今、ゆれ動くこの国の生命、倫理、社会、教育などの問題に応える、学ぶべき史実がここにある。

▼福永伸哉著『**三角縁神獣鏡の研究**』B5判・上製箱入・定価八四〇〇円　三角縁神獣鏡の製作は日本か中国か。議論の多いこの鏡を、新しい分析によって製作地を特定し、古墳時代の国家形成の特質にも言及しながら明らかする。

▼木下修一・吉岡伸也編『Structural Colors in Biological Systems-Principles and Applications』菊判・上製・三六〇頁　定価八四〇〇円　構造色に関する物理的な基礎／生物がもつ構造色とその仕組／構造色を利用した最新の応用製品の数々。

▼大阪大学大学院工学研究科原子力専攻編『**学びに成功する「よい授業」とはなにか**』A5判・並製・二〇〇頁・定価二一〇〇円　「学びの質」を高めるために／TAは大学教育のキーパーソンか／「相互作用」が生じる授業。

関西大学出版部

▼山本幾生著『**実在と現実―リアリティの消尽点へ向けて―**』（四六判・三三六〇円）近世哲学に始まる外界の実在性の問題から今日の仮想現実まで、哲学者達の哲学に手掛かりを求めてリアリティ概念を究明し、虚構も実在と共に現実を象る〈現実の象り〉を提唱。そして、問題が外界の実在性から〈ものの不在性〉へ転換していることを提示する。

▼石田浩著『**台湾民主化と中台経済関係**』（A5判・三七八〇円）国民党独裁体制の崩壊と総統・立法委員などの各種民意代表選出という民主化過程を詳細に分析。同時に台湾経済の対中依存拡大を膨大な資料に基づき分析し「政治の内向化と経済の外向化」、政治（理想）と経済（現実）の矛盾を抱えた台湾の未来を予測する。

▼杉谷眞佐子・高田博行・浜崎桂子・森貴史編著『**ドイツ語が織りなす社会と文化**』（A5判・三六七五円）本邦初訳のドイツ人研究者の論考を含む本書は、さまざまなテクストからドイツ語圏の言語文化を読み解き、二十一のテーマ圏の研究へいざなう。研究上の手引きとなるよう、参考文献が丁寧に挙げられている。

関西学院大学出版会

新刊

▼牧里毎治・加山　弾・高杉公人著K・Gりぶれっと『**社協ワーカーへの途**』社協実習者のための実践用ワークブック（A5並製・一二六頁・定価一二六〇円）

▼関西学院大学災害復興制度研究所編『**被災地協働―第一回全国交流集会から**』被災地の経験を共有し復興支援に生かす。（A5並製・一八二頁・定価一五七五円）

▼武田　丈編著『**フィリピン女性エンターテイナーのライフストーリー**』彼女達の現状とその背後にある問題とは。（A5並製・二一六頁・定価二二〇五円）近刊

▼紺田千登史著『**フランスの哲学―そのボン・サンスの伝統と日本、アメリカ**』（A5上製・三三〇頁・定価四四一〇円）

▼村尾信尚編著もうひとつの日本を考える会『**日本を変えるプランB**』（四六上製・二〇〇頁・定価一六八〇円）

九州大学出版会

▼西川盛雄編『**ラフカディオ・ハーン―近代化と異文化理解の諸相―**』（A5判・三八〇頁・二七三〇円）最新の研究成果に基づく、ハーン（小泉八雲）の生涯とその作品の学際的研究書。

▼恒吉法海訳『**ジャン・パウル中短編集I**』（A5判・五六四頁・八九二五円）『フィーベルの生涯』『カンパンの谷』『ジャン・パウルの手紙とこれから先の履歴』待望の完訳。楽しき無常の世界。

▼高橋隆雄編『**生命・情報・機械**』〈熊本大学生命倫理研究会論集6〉（A5判・二五〇頁・二九四〇円）情報に関する基礎的概念を踏まえて、生命と情報の基本的関係を探る。論集最終巻。

▼山中進・上野眞也編著『**山間地域の崩壊と存続**』（A5判・二四四頁・三一五〇円）持続可能な地域社会の形成を論じる地域政策研究の書。「地域公共圏の構想」シリーズ刊行開始。

▼谷正和著『**村の暮らしと砒素汚染―バングラデシュの農村から―**』（新書判・二〇四頁・一〇五〇円）環境人類学の視点から開発援助のあり方を考える。〈KUARO叢書5〉

部会だより（編集部会）

▼編集部会のこころ……

現在、大学出版部協会の主たる活動は、編集、営業、電子、国際の四部会によって運営されている。この四部会の名称、実にいまの出版業界全体の在り様と方向性を表わして簡にして要を得ていると思う。

で、編集部会である。出版というなりわいに編集業務が不可分・不可欠なのは当たり前。だが、各大学出版部の編集者が呉越同舟（と思うのだが）、出版の理念を追究し、語りあい互いに編集技術を研鑽しあう「会」の存在となると話は別だ。

私は、編集部会の一員に加わりながら、ふと不逞にも、この部会の存続していること自体に不思議を感じてしまうのである。私の偏頗な思い込みかもしれないが、そもそも「編集者」という種族は、比較的に孤を好み、ひとかどのライバル心もあり、結構なうぬぼれ屋でもある。そんな連中が、小なりと言えども、一堂に会し、一つの運動体を構成してきたのだ。先人の小異を排し、大同につくを潔しとした真摯かつ悠揚たる心意気を想わずにはいられないのである。

われわれもその驥尾に付し、編集部会のさらなる発展のために微力を尽くそうと心に期す今日この頃である。

▼編集部会のそれから……

そして、去る八月二十六日、福岡の地、九州で初めて開かれた夏季研修会において、編集部会は営業部会の賛同・協力のもと、理事会の承認を得て、従来、編集部会のサークル内で行なってきた「編集・本作りのケーススタディ」を四部会を横断し、さらに協会外の書籍販売業界およびメディアにまで参加を呼びかけ、「公開研修会」を試みた。報告は、名古屋大学出版会の橘宗吾氏にお願いした。

残念ながら、メディア側からの参加は得られなかったが、福岡エリアの有力書店および取次会社の幹部の方々（九名）にご出席をいただき、大よそ好評裡に会を収めることができた。初めての試みゆえ、戸惑うこともあったし、心地よい緊張も走ったが、法人化を機に、より業界（世間）に開かれた活動を目指しての第一歩を踏み出したとは言えよう。少なからぬ反省を踏まえ、公開研修会を継承・発展させる気運が高まっているところだ。

言い忘れたが、編集者の大事な資質がもう一つある。バカがつくほど、限りなく楽天的であること。

関西支部だより

大学出版部の新たな試み――京都大学学術出版会「学術選書」

昨年十二月の第一回配本の四冊を皮切りに、すでに六冊の書物が刊行された、京都大学学術出版会の「学術選書」。

とかく難しそうで、小部数で、高価格の本が連なる大学出版部の書籍ラインナップのなかで、この京都大学学術出版会のチャレンジは、一際眼を引くものでしょう。この「学術選書」の刊行趣旨にはつぎのように記されています。

「携帯電話一つとってみても、私達の暮らしは、科学・技術の支え無しには成り立ちません。しかし今日の科学は、研究者の間でさえ、少し専門が異なると理解することが難しい程に高度化し、一言で言えば「難しい」ものになってしまいました。しかし、これは悲観することではありません。本来、この世界は「分からないこと」だらけです。進歩したと言っても、まだ科学はこの世界のほんの一隅を理解しただけなのです。そしてなにより、この「分からない」ところにこそ、科学を学ぶ面白さ、楽しさがあるのです。「分からないから面白い」――このことを少しでも知っていただきたい。……」

「大学と社会を結ぶ知のネットワーク」の構築が大学出版部協会の大きな目的のひとつですが、その理念実現のために、より多くの読者の方々に手にとってもらうような書籍の形態を整え、先の刊行趣旨に掲げたような学問の面白さ、楽しさを伝えるように内容の充実を図ることにはさまざまな困難が伴います。その幾重もの困難を乗り越え、ひとつの明確な「学問への入り口」としてかたちづくられたのがこの「学術選書」です。

「学術選書」はサイエンスの多彩なテーマを用意しています。読者の方々が興味のあるテーマに出会ってくれることを期待しています。

編集後記

大学出版部協会が有限責任中間法人として法人化されて数ヶ月経過しましたが、この間、協会各部会では、法人化後の取り組みとしてどのようなことができるのか、またどのようなことを行っていかなければならないか、について真剣な議論がなされてきました。本誌特集では、将来の展望を中心に各執筆者に想いを語っていただきましたが、読者の方々には大学出版部協会の今後の姿をどのように想像していただけたでしょうか。

あくまで私見ですが、大学出版部協会の機能は、現在の六大学出版部を束ねる「ホールディングス・カンパニー」として考えてみてはと思っています。個々の事業組織のあり方は違えど、ミッションを共有するそれぞれの出版部が活き活きとした活動をするための目配りと後押しをする、それに十分な力を持つ組織になってくれれば、と考えています。

最後に、本誌の刊行が大幅に遅れましたこと、読者の皆様および関係の方々に深くお詫び申し上げます。

黒田拓也(東京大学出版会)

有限責任中間法人大学出版部協会 加盟出版部一覧

北海道大学出版会
060-0809 札幌市北区北9条西8丁目 北海道大学構内
TEL 011-747-2308 FAX 011-736-8605

東北大学出版会
980-8577 仙台市青葉区片平 2-1-1 東北大学構内
TEL 022-214-2777 FAX 022-214-2778

流通経済大学出版会
301-8555 龍ヶ崎市平畑 120
TEL 0297-64-0001 FAX 0297-64-0011

聖学院大学出版会
362-8585 上尾市戸崎 1-1
TEL 048-725-9801 FAX 048-725-0324

聖徳大学出版会
271-8555 松戸市岩瀬 550
TEL 047-365-1111 FAX 047-363-1401

麗澤大学出版会
277-8686 柏市光ヶ丘 2-1-1
TEL 04-7173-3331 FAX 04-7173-3154

慶應義塾大学出版会
108-8346 港区三田 2-19-30
TEL 03-3451-6926 FAX 03-3451-3124

産業能率大学出版部
103-0028 中央区八重洲 1-3-19 辰沼建物ビル7階
TEL 03-5205-2255 FAX 03-5205-2470

専修大学出版局
101-0051 千代田区神田神保町 3-8-3 専修大学4号館
TEL 03-3263-4230 FAX 03-3263-4288

大正大学出版会
170-8470 豊島区西巣鴨 3-20-1
TEL 03-5394-3026 FAX 03-5394-3038

玉川大学出版部
194-8610 町田市玉川学園 6-1-1
TEL 042-739-8935 FAX 042-739-8940

中央大学出版部
192-0393 八王子市東中野 742-1
TEL 0426-74-2351 FAX 0426-74-2354

東京大学出版会
113-8654 文京区本郷 7-3-1 東京大学構内
TEL 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958

東京電機大学出版局
101-8457 千代田区神田錦町 2-2
TEL 03-5280-3433 FAX 03-5280-3563

東京農業大学出版会
156-8502 世田谷区桜丘 1-1-1
TEL 03-5477-2562 FAX 03-5477-2643

法政大学出版局
102-0073 千代田区九段北 3-2-7
TEL 03-5214-5540 FAX 03-5214-5542

武蔵野美術大学出版局
180-8566 武蔵野市吉祥寺東町 3-3-7
TEL 0422-23-0810 FAX 0422-22-8309

明星大学出版部
191-8506 日野市程久保 2-1-1
TEL 042-591-9979 FAX 042-593-0192

早稲田大学出版部
169-0071 新宿区戸塚町 1-104-25
TEL 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406

東海大学出版会
257-0003 秦野市南矢名 3-10-35 東海大学同窓会館内
TEL 0463-79-3921 FAX 0463-69-5087

名古屋大学出版会
464-0814 名古屋市千種区不老町 1 名古屋大学構内
TEL 052-781-5027 FAX 052-781-0697

三重大学出版会
514-8507 津市上浜町 1515 三重大学出版ホール内
TEL 059-232-1356 FAX 059-232-1356

京都大学学術出版会
606-8305 京都市左京区吉田河原町 15-9 京大会館内
TEL 075-761-6182 FAX 075-761-6190

大阪経済法科大学出版部
581-8511 八尾市楽音寺 6-10
TEL 0729-41-8211 FAX 0729-41-9979

大阪大学出版会
565-0871 吹田市山田丘 1-1 大阪大学事務局内
TEL 06-6877-1614 FAX 06-6877-1614

関西大学出版部
564-8680 吹田市山手町 3-3-35
TEL 06-6368-1121 FAX 06-6389-5162

関西学院大学出版会
662-0891 西宮市上ヶ原1番町 1-155
TEL 0798-53-5233（内線3475）FAX 0798-53-9592

九州大学出版会
812-0053 福岡市東区箱崎 7-1-146 九州大学構内
TEL 092-641-0515 FAX 092-641-0172

大学出版 六六号（二〇〇五年秋／冬）二〇〇六年三月一日発行 頒価一〇〇円（〒共）発行所＝有限責任中間法人大学出版部協会 ISSN 0913-3305 振替〇〇一七〇—八—三八九一三一
〒一一三—〇〇三四 東京都文京区湯島二丁目一四番一一号 電話〇三（三八三四）六六八六 E-MAIL: mail@ajup-net.com URL: http://www.ajup-net.com/